第６章　反復帰論における日本側知識人の影響
―ヤポネシアとアナキズム―

はじめに

１　沖縄独立論との差異

２　ヤポネシア論とは

⑴ヤポネシア論の意図

⑵ヤポネシア論の展開と批判

３　反復帰論へのヤポネシア論の影響

⑴反復帰論におけるヤポネシア論

⑵ヤポネシア論における国家論

４　反復帰論とアナキズム

⑴アナキズムの導入

⑵1960 年代のアナキズム論

おわりに　ヤポネシア論とアジア、反復帰論とアジア

第 6 章　反復帰論における日本側知識人の影響―ヤポネシアとアナキズム―

それゆえに、私の反復帰の母体は、島尾敏雄である、と言い切ってもよい
新川明『沖縄　統合と反逆』（2000 年）

はじめに

沖縄の日本復帰が現実味を帯び始めた 1960 年代後半、反復帰論といわれる議論が登場した。新聞記者である新川明、川満信一、琉球大学教授である岡本恵徳らがその論者として知られている。彼らの主張は単に日本への復帰に反対というだけではなく、沖縄の独自性を基盤としながら、反国家・反権力を志向する思想的営為であった。彼らの主張は沖縄の日本復帰でもなく、沖縄の独立でもない。彼らが訴えたことは国家を否定し国家を超えることにあった。

反復帰論における日本側知識人の影響を検討する必要性についてはこれまでにも指摘されている。例えば、 藤澤健一は新川の反復帰論に影響を与えた 3 冊として、島尾敏雄『離島の幸福・離島の不幸』、森秀人『甘藷伐採期の思想―組織なき前衛たち』、大沢正道『反国家と自由の思想』を取り上げ、その意義を今日的視点から問い直す必要性を訴えている[1]。また、ヤポネシア論と岡本恵徳の思想の関係について浜川仁は批判的に検討している[2]。しかし、未だその研究は端緒についたばかりで十分に進められているとは言えない。

本章では反復帰論者の中でも代表格と目されている新川を中心に取りあげ、彼の論考における日本側知識人の影響に焦点を当てる。ここでいう日本側知識人とは、その出身地や血筋ではなく（それらも大きな要素ではあるが）その議論の結論部分が主に日本への批判や提言となっている人々を指す。換言すれば日本を論じるために沖縄に言及した知識人である。

新川の著作を一瞥すると、島尾敏雄、谷川健一、吉本隆明、大江健三郎の名前をすぐに見つけることができる。今回は主にその中でも強く影響を与えたと思われる島尾敏雄によるヤポネシア論について論じる。すなわち、日本国の相対化を図ったといわれるヤポネシア論が、反復帰論ではどのように受容されたかを言説分析を通じて検討することが本章の目的である。反復帰論は日本という国家への再編入に際して、沖縄と国家との関係性を議論してきた。また、日本側においても復帰を目前にした沖縄を日本の中でどのように位置づけるべきかという問いに対する答えを模索した時期とも重なる。このような議論に対して強い影響を与えたのが、ヤポネシア論であった。ヤポネシア論は 1960 年代の初めから沖縄と日本との関係について、文化論の視点から取り組んできた。

また、新川の論考に大きく影響を与えたと思われるもうひとつの議論としてアナキズムがある。反復帰論の大きな特徴である「ネイションに根ざしながらステイトを否定する」という主張がどのように形成されていったのかを考察する上で、反復帰論とアナキズムの

関連性を考察することは必要不可欠である。

そこで本章では、反復帰論の立ち位置を明確にするため、まず当時の沖縄独立論と反復帰論の違いを確認する。次にヤポネシア論の特徴を概観した上で、反復帰論におけるヤポネシア論の影響について考察する。さらにアナキズムからの影響を検証した上で、最後にまとめとして「日本・沖縄」からアジアまでを射程にいれながら反復帰論の可能性を考えたい。沖縄は太平洋の要石として、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争と常に戦争の最前線にあった。さらに米軍基地から派生する事件・事故は後を絶たない。この状態を作家の目取真俊は「戦後ゼロ年」と表現する[3]。北東アジア地域には冷戦構造がいまだ存続し、緊張が解けない。それゆえに、アジアにおいて平和を築くことための学知の蓄積が必要とされているのであれば、沖縄の経験、すなわち日本へ再び包摂されるという 1972 年の日本復帰についてなされた、国家と民族を巡る議論はアジアの平和を考える上でも決して無意味ではないであろう。

1　沖縄独立論との差異

1970 年前後に反復帰論と同じく沖縄の日本復帰に対して反対していたグループとして、「沖縄人の沖縄を作る会」が存在する。そのメンバーとしては、当間重剛（元琉球政府主席）や山里永吉（元琉球政府文化財保護委員長）らが知られている。特に山里は独立論を理論的に裏付けようと論を展開していた。その際に重視されたのは経済的既得権と琉球王国としての歴史である。また、独立論者は米国への親近感も持っていた。なお、「沖縄人の沖縄を作る会」は後に琉球独立党[4]と合併、解消している。

「沖縄独立論」の特徴としてまず、沖縄の保守派、財界人によって支持されていた点である。当間と山里はいわゆる保守・革新の分類では保守派に属するが[5]、沖縄独立論を主張した理由としては、アメリカ占領下における既得権益の守旧が主な目的であったためと考えられる。山里は著作の中で「反米も親米も、すべての沖縄人が一人残らず基地経済の恩恵をこうむつているのも、また否定できない事実である」と、基地経済の恩恵を否定せず現状を追認する姿勢がみられる[6]。

さらに 1969 年 10 月 10 日、沖縄タイムスに掲載された「沖縄人の沖縄を作る会」結成・総決起大会の広告によれば、そのメンバーとして、煙草会社や飲料メーカーの社長など地元企業の経営者らが名を連ねていた。また、その時の新聞広告として掲載された設立趣旨には以下のような表現がみられる。「現在の沖縄の政治家は日本を叫ぶに急で、それに伴なう経済的混乱をどう切りぬけるかという具体案を示したものは一人もいない」「ことに現在の沖縄の経済はおそらく有史以来ではないかとおもわれるくらいな繁栄の途上にある。〔略〕沖縄は東南アジアの一角に、特殊な文化と経済をもつ楽土を建設するだろう」[7]。このように、米軍占領下にあった沖縄の基地経済を肯定的に評価していたことがわかる。

そして山里が独立を主張したもう一つの根拠が、琉球王国としての歴史であった。山里

は著書『沖縄人の沖縄―日本は祖国に非ず―』において沖縄が独立すべき理由として、琉球王国の歴史がいかに誇り高きものかを何度も繰り返す[8]。その著作の中で山里は「われわれは日本人である前に沖縄人であることを忘れてはならない」と明確に沖縄アイデンティティを表明した。山里は琉球王国の歴史でも、とりわけ薩摩侵入以前に着目した[9]。「われわれの先祖が自由で幸福であった完全な独立国時代と、1609 年に薩摩の侵略を受け、奴隷のような不幸のどん底に呻吟した時代」という表現にみられるように、薩摩侵入以前の琉球王国を積極的に評価していた[10]。 この薩摩侵入以前の琉球王国は大交易時代とも呼ばれ、東アジア地域において琉球が貿易の拠点として発展していた時期である。このように経済的繁栄と琉球王国の歴史がリンクした形で、独立論は展開された。

以上のような論理をもって山里らは独立を主張したが、彼らのスタンスは決して反米ではなく、どちらかと言えばむしろ親米の傾向が見られた。直接アメリカへの親近感を表すことは多くはなかったが、例えば、当間の回顧録では主席就任直前に「アメリカも領土的野心はないことを世界に公言しているのだから、いまさら世界の目をあざむくわけにはいかんし、アメリカを信ずる以外方法はない」という意見を語ったことが記されている[11]。また、ジェームス・E・モーア高等弁務官を「彼は一言も沖縄人の悪口を言わなかった。紳士的であったのだ」と肯定的に評価していた[12]。さらに復帰運動については「けっして反米ではない。子が親を慕うようなもので、損得を離れての感情である。しかしすぐ帰った方がよいかどうか、真剣に考えると足ぶみをする人がいる。日本や沖縄の現状から、もっと時をかせいだ方がよいという考えもある」であると捉えていた[13]。これらを勘案すると、彼らの目指す独立国は、純粋な自主独立を目指すものというより、引き続きアメリカの強い影響下にある国家を想定していたと考えられる。

このような沖縄独立論の要点を簡単にまとめれば以下のようになろう。独立派は経済的利得のために独立を支持していた。そして独立の正統性を裏づけるために、琉球王国の歴史を強調した。彼らは独立し経済的に発展した琉球王国の歴史を現在にオーバーラップさせることによって、その主張を正統化したのである。しかし、そこで意図されていた独立は米国の影響下でのものであった。

これに対して新川は、沖縄人を規定するものとして日本に対する「異質感」と考えていたことは前述のとおりであるが、沖縄アイデンティティを構成する要素として琉球王国の歴史を指摘したことはなく、またその歴史を積極的に評価したこともない。むしろ新川は山里らによる運動を「退行的な独立論発想の琉球ナショナリズム」とし厳しく批判している[14]。また、反復帰論者は琉大文学時代から土地闘争を通して反基地・反米軍の姿勢を示してきた。これらのことから、反復帰論とほぼ同時期に山里永吉らによって提唱されていた「沖縄独立論」は明確に区別される[15]。

それでは、日本復帰でも沖縄独立でもない反復帰という立場を屹立させたヤポネシア論とはどのような思想であったのだろうか。

2　ヤポネシア論とは

(1)ヤポネシア論の意図

島尾敏雄は 1917 年、福島出身の両親の下に横浜で生まれた。28 歳のときに終戦を迎えたが、8 月 13 日に特攻命令を受けていた。翌年、奄美出身の大平ミホと結婚し、38 歳で奄美大島に転居している。そして 1958 年、41 歳の時に鹿児島県立図書館奄美分館長に就任した。

「ヤポネシア」という言葉は島尾の造語である。初出は 1961 年『世界教養全集』21 巻の月報 15 号に掲載された「ヤポネシアの根っこ」だとされている[16]。奄美での経験を基に意図されていたのは、大陸に従属する日本ではなく、南島の島々のつらなりとして日本を捉えることであった。

> もちろん根深くささった大陸からの刺激と貸与を無視しては日本についてどんなことも考えにくいにちがいないが、でもその方ばかりを向いていたのでは、いつもどんづまりの吹きだまりの実験場所という受身の感じからぬけられない思いがしはじめたことだ。そのこととからみ合って、地図帳の上の日本はいつも大陸の末端のところでしかとらえられないようだ。もとは大陸に附属していたが残念なことに、あいだの陸地が陥没してほんのわずかばかり離れてしまったとでもいいたげに！〔略〕
>
> ひとつの試みは地図帳の中の日本の位置をそれらの島々の主題にして調節してみることだ。おそらくは三つの弓なりの花かざりで組み合わされたヤポネシアのすがたがはっきりあらわれてくるだろう。〔略〕そして日本の、南太平洋の島々のひとつのグループとしての面を考えることは、かたくしこってしまった肩のぐりぐりをもみほぐしてくれるにちがいない[17]。

「三つの弓なりの花かざり」は南西諸島、日本列島、千島列島を指しているが、ここで着目すべきは、まるで地図をひっくり返すかのような文学者らしいダイナミックな認識の転換を行っている点である。これにより、中国による日本への圧倒的なの存在感もしくは影響力を相対化しようとしている。

また、60 年代後半のヤポネシア論に関する論考では、日本は「東北」「中央日本」「琉球弧」の三つの部分で構成されている。

> 私は近ごろ、自分の国である日本という国を、三つの部分から成立しているのではないかと思えて仕方がない。それは北の方から言うと、東北と中央日本と琉球弧の三つの部分なおかつつづめて言うと、日本の歴史の展開とそのとらえられ方は、おおよそ中央日本だけを目のなかに据え置くことによって、そのことに疑いを持たず、それを基盤としておこなわれて来たのではなかったか[18]。

ここでは日本の性質を単純なものではなく、「東北」、「中央日本」、「琉球弧」に色分けすることにより日本の複雑性を描き出そうとしている。島尾によれば、その複雑性、つまり「東北」と「琉球弧」を隠しているのが「中央日本」なのである。そこには、東北出身の両親という血筋と奄美での経験が反映されているのは想像に難くない。

さらには、奄美の本土に対するコンプレックスを払拭し、日本に置いて正当な位置づけを行い、「励ましを送る」ことが、ヤポネシア論を唱える動機のひとつであった。それゆえに沖縄にて多くの人々の共感を呼び、受容された[19]。さらに「中央」と「東北」「琉球弧」の支配―被支配構造への認識は 1970 年ごろに顕著になったと岡本は指摘している[20]。

以上がヤポネシア論の概要である。次項では、ヤポネシア論を日本側知識人、特に新川の論考に引用されている論者がどのように受容してきたかを整理していく。

(2)ヤポネシア論の展開と批判

沖縄の日本復帰が現実味を帯びた 1960 年代後半、日本側知識人は沖縄が日本に再び組み込まれるという事態に際して、その意義を探るべく論考を発表した。その際に援用されたのは、比較的早い段階から日本と琉球弧の関係に言及していた島尾のヤポネシア論であった。

1969 年、吉本隆明は「異族の論理」を発表する。論の冒頭、吉本はいわゆる沖縄返還問題の本を読みあさるが、そこに興味はわかず、島尾敏雄の文章が懐かしくなり、沖縄問題は日本人の起源、日本文化の起源とはなにか、そして日本における沖縄の場所を探ることの方が現状に対して切実である、と述べる[21]。そして沖縄の特性を縄文的であると規定し、それにより天皇制によって成立してきた日本の歴史を相対化できると論じた。

> 琉球・沖縄の存在理由を、弥生式文化の成立以前の縄文的、あるいはそれ以前の古層をあらゆる意味で保存しているというところにもとめたいとかんがえてきた。そしてそれが可能なことが立証されれば、弥生式文化＝稲作農耕社会＝その支配者としての天皇（制）勢力＝その支配する＜国家＞としての統一部族国家、といった本土の天皇制国家の優位性を誇示するのに役立ってきた連鎖式な等式を、寸断することができるとみなしてきたのである。いうまでもなく、このことは弥生式文化の成立期から古墳時代にかけて、統一的な部族国家を成立させた大和王権を中心とした本土の歴史を、琉球・沖縄の存在の重みによって相対化することができる。〔略〕琉球・沖縄は現状のままでも地獄、本土復帰しても、米軍基地をとりはらっても、地獄にきまっている。ただ、本土の弥生式以後の国家の歴史的根拠を、みずからの存在理由によって根底から覆しえたとき、はじめていくばくかの曙光が琉球・沖縄をおとずれるにすぎない[22]。

上記の文章からわかるように、吉本にとって沖縄の日本における存在理由は、縄文的文

化の遺制を持ち、「異族」として日本に存在し、弥生式文化を端緒とする天皇制を相対化するときに初めて満たされるのである。少なくとも吉本にとっては沖縄への施政権や米軍基地の存在は大した問題ではなかった。

1970 年、谷川健一も「＜ヤポネシア＞とは何か」において、これまでの日本を相対化する視点としてヤポネシアをとりあげた。単一的で粗雑な日本ではなく、複合的で精密なヤポネシアを想定し、支配者によって形成された直線的な日本の歴史を解きほぐす必要性を訴えた。

> ヤポネシアは、日本脱出も日本埋没をも拒否する第三の道として登場する。日本にあってしかもインターナショナルな視点をとることが可能なのは、外国直輸入の思想を手段とすることによってではない。ナショナルなものの中にナショナリズムを破裂させる因子を発見することである。それはどうして可能か。日本列島社会に対する認識を、同質均等の歴史空間である日本から、異質不均等の歴史空間であるヤポネシアへと転換させることによって、つまり「日本」をヤポネシア化することで、それは可能なのだ[23]。

谷川の言う「インターナショナルな視点」を日本内において見出そうとするとき、その足がかりとなったのがヤポネシア論であると捉えられている。そして、本論考はヤポネシア論が広く知られるようになった契機の一つでもあった。

しかし、谷川は 1987 年、『文学界』島尾敏雄追悼特集において、ヤポネシア論に対し批判を加える。それは、「ヤポネシアに無権力社会の幻を夢みる私の志向」を明らかにした上で、「日本列島の中央部を占める倭人の権力社会を抜きにした場合のヤポネシア論は、歴史社会の形成の動因を考慮に入れないことによって、静的なモデルとして甘んじなければならない」というものであった[24]。

以上、吉本と谷川についてヤポネシア論がどのように受け入れられたかを見てきた。両者に共通することは、現実の日本社会を相対化する梃子の支点として琉球弧を捉える視点をヤポネシア論から取り入れたこと、そして天皇制や権力に関連する国家論に引き付けて議論されていたことである。

なお、ヤポネシア論に直接言及されてはいないが、大江健三郎についても同様の傾向が見て取れる。『沖縄ノート』では「沖縄の先駆的な知識人についても…決して日本の『中華思想』的感覚にのみこまれず、天皇制国家のピラミッドを支える中央志向性に対しても、したたかな相対主義の自由を放棄することのなかった面だましいが実在することを、僕は見出さぬわけにゆかなかった」とある[25]。やはりここでも沖縄を支点として日本を相対化しようとする試みが見られる。

それでは、ヤポネシア論とその周辺の議論はどのように新川の反復帰論に影響を与えたのだろうか。

3　反復帰論へのヤポネシア論の影響

(1)反復帰論におけるヤポネシア論

新川は 1970 年に発表した論考において、島尾敏雄とヤポネシア論に関して次のように記している。「たとえば『ヤポネシア』とそれにかかわる『琉球弧』についてつぎ〔「ヤポネシアの根っこ」〕のように島尾が書くのを読むとき、わたしは深い衝動にからだの内側から強くつき動かされてしまうのをどうすることもできない」[26]。

また、新川は 2000 年に刊行された私史的評論集『沖縄　統合と反逆』で自身の反復帰論における「ヤポネシア」論の影響を以下のように回顧している。

> 私のいわゆる反復帰論は、このあとさらに島尾の「ヤポネシア」論の「衝迫」によって結実に向かうことになる。ここに至る道程で、60 年代における島尾との「出会い」と、以後持続的に発信される「黙示」こそがその基盤をつくる最大の力となったことは動し難い。それゆえに、私の反復帰の母体は、島尾敏雄である、と言い切ってもよいのである[27]。

> 実体的な国家としての「日本」と自らの生存域との緊張した関係性の中で、切迫した状況に立たされて危機意識をつのらせている人にとっての「ヤポネシア」論は、新しい国家論あるいは国家観を触発させる起爆剤となり、そこから「独立」論を含む多様な議論を生み出していくことになる[28]。

また、新川は島尾による著作のうち、特に「『沖縄』の意味するもの」(『離島の幸福離島の不幸』1960 年刊行に所収)、「滑稽な場所から」および「ヤポネシアの根っこ」(共に『非超現実主義的な超現実主義の覚書』1963 年刊行に所収）の 3 つをとりあげ、その意義を以下のように述べている。

「『沖縄』の意味するもの」では、沖縄の持つ文化的な良さは歴史上、日本によって隠されており、その苦難の歴史を持つ南島の人々こそ、日本の怠慢に匕首をつきつける権利があるという内容である。その意義を新川は「日本という国と沖縄との関係性を考えるに際しての、私（たち）に欠けている視点を示唆するもの」であるとした[29]。「滑稽な場所から」には日本共産党系の雑誌である『新日本文学』に作品を載せるよう頼まれた島尾が社会主義リアリズムという枠組みの中で書かざるを得ないことに対する違和感を表明したものである。新川にとっては「社会主義のイデオロギーに立った文学活動をしていた自らの思想の硬さを、大阪経験の中でほぐしつつあった私に、〔略〕自己変革をうながす『黙示』であった」という[30]。そして「ヤポネシアの根っこ」については「島尾の『ヤポネシア論』がそれぞれの問題意識に添ってその思考を刺激し、想像力を喚起する多面的で柔軟な概念であることを開示する」と新川は位置づけている[31]。

新川以外の反復帰論者である岡本や川満によるヤポネシア論の受容とその比較についてはひとつだけ議論を紹介しておく。島尾と新川、岡本、川満による座談会において、新川と川満はヤポネシア論の意義について議論となる[32]。ヤポネシア論はあくまで相対化のための視点であるという新川と、同時に新たな文化の創造もなされなくてはならないという川満は議論がすれ違う。その背景には多良間島出身の川満には確固たる共同体の記憶があり、その言葉（方言）を表現する道標としてヤポネシア論があった。しかし幼少期に沖縄島から石垣島に移転した新川にとっては、川満のような確固たる共同体がない。それゆえに、ヤポネシア論は画一的日本を相対化する視点として受容され、文化創造の指針となってはいなかった。ここにも前章で論じたように、反復帰論者間の違いが垣間見える。

(2)ヤポネシア論における国家論

新川が提示した 3 つのエッセイのうち、ヤポネシア論に関するのは「『沖縄』の意味するもの」と「ヤポネシアの根っこ」であり、ヤポネシア論初期の作品である[33]。

新川の反復帰論において中核と位置付けられる論考「『非国民』の思想と論理」においては、前述の吉本や谷川の論考も引用されているにも関わらず、島尾への評価が格段に高い。その理由として考えられるのは、吉本や谷川の論考が日本という国家論を中心に据え、日本を相対化する梃子の支点として琉球・沖縄を捉えているのに対して、島尾のヤポネシア論は国家論、とりわけ権力構造[34]への考察は見られないことである。この傾向は特に 1960 年代初期に明白である。このことを谷川は権力社会の不在であると言い[35]、岡本はヤポネシア論における「国家論の欠如」であると述べている[36]。

ヤポネシア論と国家論の関係については、現在でも多様な解釈がなされている。田仲康博はヤポネシアという文学的な言葉は時と場合によって政治的な概念となって受けられると指摘する。国境を持つ国民国家という概念を解きほぐすヤポネシア論自体は「反」国家論ではなく「非」国家論である、というのである[37]。さらに田仲は島尾が沖縄をユートピアとして捉えていた事実を踏まえつつ、以下のように語る。「〔ヤポネシア論によって〕自らを語る言葉を与えられたと錯覚した彼らを理解するためには、同化と異化の間を揺れる時代の振り子が復帰前後の沖縄では同化の方法に大きく揺れていた情況を理解しなければならない」[38]。

大陸文化の影響を強く受けた、弥生文化中心の日本を、「琉球弧」「東北」「中央」という複合的なヤポネシアとして読み替え、琉球・沖縄の人々のコンプレックスの払拭を意図した島尾のヤポネシア論は、反復帰論においては沖縄の独自性を打ち出し、日本からの自立を主張するための理論的支柱となった。それは、吉本や谷川らにくらべて、島尾のヤポネシア論が「国家論」の色合いが希薄なため可能となった。

このような反復帰論者によるヤポネシア論の受容の特色は、奄美におけるヤポネシア論の受容と比較した場合より顕著となる。新川をはじめとする「沖縄」に立脚した反復帰論者はヤポネシア論を国家論として解釈し、沖縄の独自性を強調するための思想として受容

した。それに対し奄美出身の詩人である藤井令一は、ヤポネシアにおける琉球弧を日本本土と異なる場所としてではなく、あくまでも日本の一部として捉えた。前利潔はその理由として、沖縄には帰属すべき実体として「琉球」が存在し、それにより沖縄自体がいわば「本体」となりえるが、奄美では奄美自体が「本体」となりえる歴史・社会的背景がなかったためと述べる。それは琉球王国の一部であった奄美諸島が、島津氏による琉球侵入後に薩摩藩の直轄地となり、近代以降は鹿児島県の一部となった歴史的経緯に由来するのである[39]。

ここまで見てきたように、「非」国家論であるヤポネシア論を、反復帰論者は国家論として読み取り、さらにヤポネシア論に国家論的影響を与えた。国家論への読み替えは「国家としての日本」に抵抗するために新川にとって必要な作業であった。以上が論考自体から読み取れる論理的展開であるが、島尾と谷川、それぞれとの個人的な交流からもヤポネシア論が重用されている可能性も指摘されよう。新川と島尾は奄美分館長時代から死去直前まで交流があった[40]。それに対し谷川からは、反復帰論は実際に沖縄が日本に復帰した場合にはなんら意味を持たなくなると指摘され反復帰論を単なる政治的状況論として捉えられたことに落胆した、と新川は語っている[41]。

また「国家としての日本」への抵抗に関しては、新川の八重山経験にも着目しなくてはならない。新川は 33 歳となった 1964 年、労働組合運動が原因となり八重山支局勤務となる。この配置転換をきっかけとして 8 歳から 15 歳までをすごした八重山で新川は島々をまわり、その歴史と人々の生活を克明に記したルポルタージュを『沖縄タイムス』紙上に連載する。約 1 年間で 44 回の連載は 1978 年に『新南島風土記』[42]としてまとめられた。その「あとがき」には以下の様につづられている。

> いささか肩肘はった言い方をすれば、日本の政治や文化を東京だけを中心に考えていることが馬鹿気ているように、沖縄の政治や文化も那覇や首里だけを中心に考えることは無意味である。八重山のそれを石垣島だけを中心に考えることのあやまりも、やはり自明のことと言わなければならない。那覇からみれば、さい果ての辺地と考えられる石垣島にあって、そこからさらに辺地とみられる離島の数々。その島々に生きる人々の生きざまを、それぞれの島の歴史風土のなかでとらえ返し、共有するための努力を重ねることこそが、流動する過酷な時代と本源のところで対峙することになるのではないのか。――ここに思い至ったとき、私の内がわで新しい何かが芽吹くのを、ある確かな手触りで感じないわけにはいかなかったのである。たしかその素地は、この時を遡る五年ほど前の島尾敏雄さんとの“出会い”によって、私の内がわにもたらされていたものだが、〔略〕遅鈍な私のなかでは、いつもこのように遅れて発酵するのが常である[43]。

このように新川は、東京中心に日本を考えることや那覇を中心に沖縄を考えるのではな

く、島々に生きる人々の生きざまを捉え共有することこそが重要であり、その考え方の素地は島尾との出会いによって生まれたと回想している。

新川の論考において八重山の経験が重要な役割を果たしていることが分かるが、ここで留意すべきは、新川の反復帰論で表象される沖縄は、首里と八重山の対立構造、もしくは重層的な沖縄像というよりは、多様ではない画一的な沖縄が屹立していることである。これは国家という大きな力に抵抗するために、内部構造を捨象し、シンプルで明確な沖縄像を提示する必要があったためと考えられる。

4　反復帰論とアナキズム

(1)　アナキズムの導入

新川明の反復帰論へ思想的影響を与えた議論で、ヤポネシア論とともに重要なものとしてアナキズムがある。新川はアナキズム、とりわけ大沢正道による著書『反国家と自由の思想』（1970 年）との出会いを次のように表している。

> 島尾敏雄との出会いによって最初の目の鱗を削ぎ落とされた私は、その後「ヤポネシア」論の洗礼を受ける中でさらに目を洗われ、最後に残っていた鱗が大沢のこの著作〔『反国家と自由の思想』〕で洗い流されたと形容すれば、私が反復帰＝「反国家」に到達した軌跡をもっとも的確かつ端的にあらわすことになるだろう[44]。

大杉栄全集の編者でもある大沢は本書の中で、1960 年代にアナキズムは復活したと述べている。また、今日におけるイデオロギー構築の課題のひとつとして、アナキズムでもなくマルクス主義でもない、まったく新しい理論が必要である、としている[45]。

新川は『反国家と自由の思想』最後の 2 ページより、国家の真理として、「国家は、もはや単に被支配者階級を支配し、抑圧するための実体的な政治機構であるにとどまら」ず「それは実体的な抑圧機構であると同時に、人間の存在全体に意味づけと方向づけを付与する価値体系であり、人間の思考や情緒、行動のすべてを規制する存在様式でさえある」という部分を引用している[46]。そして、個々は国家による強制を受けつつ、さらに個々が補強することによって国家が成り立ち続けることを指摘している[47]。この部分は新川の反復帰論における国家認識の核心と言えるところである。

(2)1960 年代のアナキズム論

アナキズムの影響を受けた背景としては、いわゆる既成左派政党への反発として、アナキズムが再び見直されたことがあるであろう。大沢は「左からのトロツキイズム、アナキズム、無党無派左翼等々が、『革命的保守主義』〔いわゆる既成左翼〕の保守性に反逆した学生、詩人、文学者らインテリゲンチャに浸透しつつある」と当時を評している[48]。

また、いわゆる新左翼に批判的な立場の論者も、アナキズムの影響を指摘している。例えば、「新左翼」を自称している団体の思想や行動は基本的にアナキズムの変形ないしは修正にすぎないというものや[49]、70 年闘争を進める中で重要なことは現代トロツキイズム、現代無政府主義ともいうべき思想の集団に対する理論闘争である[50]、というような内容である。

新川は「かつて自らを呪縛したマルキシズムも、沖縄人民党＝日本共産党の教条主義に対する反発から疎ましくなり、さりとて反日共系諸党派の思想にも違和感があって同調できない。一種の思想的飢餓状況にあった私は、『アナキズム思想史』〔大沢正道著、現代思想社刊、1962 年〕の著者による前記著作〔『反国家と自由の思想』〕は干天の慈雨のごときものであった」と回顧している[51]。

以上の議論をまとめると、民族性に依拠して国家を否定するという反復帰論の特徴は、沖縄の特異性を称賛したヤポネシア論と、国家の否定を志向し続けたアナキズム、60 年代に高まりを見せたこの両者に、沖縄帰属議論が媒介となり奇妙な融合を果たした結果の産物、といえるのではないだろうか。ナショナリストでアナキストという思想家として新川は理解されよう[52]。

おわりに　ヤポネシア論とアジア、反復帰論とアジア

島尾のヤポネシア論は、大陸と中央日本の強い影響から逃れ、日本を南島と東北という要素から見つめなおし、日本を相対化しようとする試みであった。しかし、ヤポネシアの地図上には、千島列島を取り込んだにも関わらず、アイヌへの言及はほとんどなかった。さらに島尾の幻想する共同体は国家を超えることもなかった、という指摘がある[53]。つまり、日本の相対化を図ったヤポネシア論の範囲は戦後の日本国を大きく超えることはなかった。その背景として、島尾が奄美に移住した翌年に書かれた以下の文章を見てみたい。

> しかし私は日本国をのがれることを為し得ない。とすると私たちには同じ国家の中において多彩な要素が混交しぶつかり摩擦し合う興奮を経験することは、遂にできないのだろうか。もちろん私は朝鮮や台湾や南洋群島を考えなかったわけではない。かつてそれらはみのりの少ない私の精神に活力を与えた。しかしそれらと血を通わせることは遂になし得なかったのだ。私の視点は次第に南西諸島にしぼられて行った。〔略〕
>
> わたしはそこをかけがえのない大事な場所と思っていたから、敗戦直後アメリカによって為された分離に私の内部はどれほど傷ついたか。やはり日本列島は北方の千島列島と南方の南西諸島によるけん引がなければちぢかまりくぐまった不具者になってしまう。だからその部分が本土から切り離されればそこから血がしたたり貧血して行くことは当然といわなければならない。
>
> その故に辛うじて奄美列島の部分が戻って来ただけでも体内にぐっと熱い血潮が還

流してくるのを感じた[54]。

領土を身体的比喩によって表現することは珍しくないが、このような強烈な描写をどのように考えればよいのだろうか。

この文章については、島尾が胸の痛みを伴って、大東亜共栄圏への夢想とその挫折を明かし、南島への志向は島尾自身の根っこである「異郷」へ抜け出たい、という解釈もある[55]。しかしここには、かつての大東亜共栄圏の範囲、朝鮮や台湾や南洋群島への憧れがあり、敗戦と同時に琉球列島がアメリカに占領されたことに痛みがあったことは見逃せない。島尾は 1945 年の敗戦、1972 年の沖縄の日本復帰という国境の再編に際して、日本を相対化し、多様で複雑な日本を表すという目的のために琉球弧の特色に意味を見出した。こうして生まれたヤポネシア論そのものは、アジアまで拡張する要素は持ちえない。

ヤポネシア論は沖縄でもっとも受容された。しかし、ヤポネシア論に触発された議論のひとつである反復帰論は民族性を高らかに謳いながら国家そのものを否定するという結論をもたらした。また、興味深いことに反復帰論は「沖縄」の範囲を明確にしていない。それゆえに反復帰論を他のアジア地域までつなげて考えることができる、という捉え方もある。例えば、仲里功は反復帰論に沖縄とアジアとの共通の深層として、植民地主義の記憶を見出す[56]。このような読み方が可能となるのは、反復帰論において「沖縄」が地理的概念と関連づけられて語られなかったことも理由のひとつであろう。これはアジアという空間を考えるうえで、ひとつの指針として捉えることも可能ではないだろうか。

その際に問題となるのは、反復帰論がついには代替的な政治的共同体を提示できなかったことにある。反復帰論者による国家を超える試みとして提案されたものとして、川満信一による「琉球共和社会憲法 C 私（試）案」[57]があげられる。ここで謳われた社会は、この憲法の賛同するひとは誰でも、国籍を問わず、その社会の一員になれるというものであった。これは反復帰論者による政治制度の提案とも解釈できるが、その実現性には疑問が残る。例えば、財政については納税の義務はなく、「財政は従来の国家が発想しえないような方法を創造しなくてはならない」とされている。説得力を持つ政体の提案ができなかったところに反復帰論の限界があった[58]。

しかし、反復帰論から得られるアジアを巡る思想の志向性として、民族性に基づきながら、国家を超え地域に関与するあり方を考えることは可能であろう。アジアに存在するネイションのひとつである沖縄でなされた、民族性に依拠しながら国家の持つ暴力性を看破した思想が持つ意味を考えることは決して無意味ではない。「祖国復帰」「民族の再統一」が声高に訴えられた状況下で生まれた思想は、ナショナリスティックな言論がいまだに散見されるこの地域だからこそ、民族と国家を分けて考え、国家ありきではない議論の方向性を立てることの重要性を鮮やかに際立たせる。

---

[1] 藤澤健一ほか編『沖縄に向き合う・眼差しと方法』（社会評論社、2008 年）、212-213 頁。

[2] 浜川仁「イデオロギーとしてのヤポネシア論―試論―」『沖縄キリスト教学院大学論集』第4号（沖縄キリスト教学院大学、2008年）、13-22頁。
[3] 目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』（NHK出版、2005年）、12-17頁。
[4] 琉球独立党は1971年に結成され、1968年の行政主席選挙に立候補した野底武彦が発起人の一人として参加している。同年の参議院議員選挙で候補者を立てるも落選、自然消滅した（島袋邦「琉球独立党」『沖縄大百科』沖縄タイムス社、1985年）。
[5] 当間と山里は 1968 年の琉球政府公選主席選挙では保守派の西銘順治を支持していた。「西銘さんを語る／当間重剛（元行政主席）／スポーツマンの良さ／過去20年の政治経験」『沖縄タイムス』（1968年10月22日）、「私はこの人を推す／西銘主席候補／山里永吉文化財保護委員／住民福祉の実行者西銘候補／貴重な政治家／一体化はスジの通った話」『沖縄タイムス』（1968年11月9日）。なお山里は該当記事で「現在の沖縄の経済が、50年以上も基地収入にたよっている現実は誰でも知っている。そういう今の沖縄で「即時全面基地撤去」をすればどうなるか。言わなくてもわかっていることである。失業者はちまたにあふれ、お互いに住民の生活は苦しくなる」と語っている。
[6] 山里永吉『壷中天地―裏からのぞいた琉球史』（光有社、1963年）、300頁。
[7] 沖縄人の沖縄を作る会「沖縄は沖縄人のものだ！われわれは日本復帰を急がない」『沖縄タイムス』（1969年10月10日）。
[8] 山里永吉『沖縄人の沖縄―日本は祖国に非ず―』（沖縄時報社、1969年）。
[9] 同上、5頁。
[10] 山里永吉『沖縄人の沖縄―食喫ゆすど吾ら主―』（第一法規出版、1971年）、1頁。
[11] 当間重剛『当間重剛回想録』（当間重剛回想録刊行会、1969年）、226頁。
[12] 同上、312頁。
[13] 同上、318-319頁。
[14] 新川明『沖縄　統合と反逆』（筑摩書房、2000年）、68頁。
[15] 「沖縄独立論」と反復帰論、両者とも復帰に反対していたという事実から、共に見られる「沖縄ナショナリズム」的側面を抽出し、沖縄アイデンティティを解明しようとする研究もある。林泉忠『「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティックス』（明石書店、2005年）および「アイデンティティの十字路―『祖国復帰』と反復帰のイデオロギー的性格を中心に―」『政策科学・国際関係論集』第7号（琉球大学法文学部、2005年）、35-66頁。なお、後者の論文において林は反復帰論を運動として理解することが適切であるとしている。しかし筆者は、反復帰論は運動ではなく思想として理解されるべきと考える。反復帰論の目的が社会的動員ではなく、あくまで思想的変革を求める点がその理由である。さらに林は反復帰論と独立論を「思想的ビジョンを示す側面と政治的目標の具現化を訴える側面との柔軟な補完関係にある」（54 頁）というが、本章で述べている通り両者の主張の立脚点および手法はまったく異なっている。
[16] 岡本恵徳『「ヤポネシア論」の輪郭』（沖縄タイムス社、1990年）、11頁。
[17] 島尾敏雄「ヤポネシアの根っこ」『世界教養全集第21巻月報』第15号（平凡社、1961年）、4-6頁。
[18] 島尾敏雄「私にとって沖縄とはなにか」『島尾敏雄全集　第17巻』（晶文社、1983年）、167頁（初出は『琉球新報』1969年2月12日）。
[19] 岡本、前掲書、12-13頁。
[20] 同上、146-147頁。
[21] 吉本隆明「異族の論理」『吉本隆明全著作集（続）第10巻』（勁草書房、1978年）、190頁（初出は『文芸』第8巻第12号、河出書房新社、1969年）。
[22] 同上　201-202頁。
[23] 谷川健一「＜ヤポネシア＞とは何か」島尾敏雄編『ヤポネシア序説』（創樹社、1977年）、62頁（初出は『日本読書新聞』1970年1月1日）。

[24] 谷川健一「鎮魂と贖罪」『文学界』1 月号（文藝春秋、1987 年）、304-305 頁。
[25] 大江健三郎『沖縄ノート』（岩波書店、1970 年）、220 頁。なお、新川は大江との間には長年にわたる親交があるが、その評価については「沖縄なんて鏡でもなんでもないわけだし、沖縄をそのようにみられるのは何かこそばゆいみたいな感じが強かった」と語っている。新川、前掲（2004 年）、133 頁。
[26] 新川、前掲書（2000 年）、41 頁。
[27] 同上、99 頁。
[28] 同上、117 頁。
[29] 同上、86 頁。
[30] 同上、98 頁。
[31] 同上、116 頁。
[32] 島尾敏雄ほか「幻の座談会　琉球弧とヤポネシア」『新沖縄文学』第 71 号（沖縄タイムス社、1987 年）、116-121 頁。なお、座談会自体は 1978 年に開催された。
[33] 新川自身も、大学生時代に創刊のメンバーであった『琉大文学』において社会主義リアリズムに傾倒し、『新日本文学』1956 年の 7 月号および 11 月号に沖縄からの土地闘争に関する現地リポートを掲載している。しかし、復帰へ懐疑的になると同時に、復帰を推進していく共産党らと対立していくことになっていく。「滑稽な場所」で明らかにされた社会主義リアリズムへの疑問は、当時の革新勢力と対立を生む契機の 1 つとして理解できる。
[34] 政治理論における権力概念は、ミシェル・フーコーの登場によって大きく変化する。フーコー以前の権力は「何々するな」と人々の行動を規制する力と理解されてきた。しかし、フーコーによる「規律」概念により「何々せよ」と人々の行動を規定することが権力の最大の作用であると理解されるようになったのは周知の通りである。しかし、フーコーは権力を国家に集中しているものではなく、社会における諸関係のいたるところに存在していると説く。筆者はフーコーによる規律を重視する権力観が肝要であると考える。しかし、反復帰論研究においてはとりわけ国家による権力について着目せざるを得ない。フーコーの政治理論上のインパクトについては杉田敦『権力の系譜学』（岩波書店、1992 年）、特に「第 2 章　ミシェル・フーコーと政治理論」に詳しい。
[35] 谷川、前掲（1987 年）、305 頁。
[36] 岡本、前掲書、185 頁。
[37] 田仲康博「他者の眼差し」『ユリイカ』第 30 巻第 10 号（青土社、1998 年）、214 頁。
[38] 同上、216 頁。
[39] 前利潔「＜無国籍＞地帯、奄美大島」藤澤健一編『反復帰と反国家』（社会評論社、2008 年）、60-64、67 頁。
[40] 新川明「島尾敏雄の若干の回想」奄美・島尾敏雄研究会編『追悼　島尾敏雄』（南方新社、2005 年）、27 頁。
[41] 新川明ほか「反復帰論と同化批判―植民地下の精神革命として（座談会）」『前夜』第 9 号（NPO 前夜、2006 年）、56 頁。
[42] 新川明『新南島風土記』（大和書房、1978 年）。
[43] 同上、239-240 頁。
[44] 新川、前掲書（2000 年）、124 頁。
[45] 大沢正道『反国家と自由の思想』（川島書店、1970 年）、3-12 頁。
[46] 新川、前掲書（1970 年）、69 頁。
[47] 新川、前掲書（1996 年）、306 頁。
[48] 大沢、前掲書、22 頁。
[49] 篠藤光行「アナキズム・アナルコ・サンジカリズム」『唯物史観』第 8 号（河出書房新社、1970 年）、96 頁。

[50] 革命思想研究会「新左翼諸潮流の理論―現代トロツキズムとアナーキズム」『月刊社会党』第 149 号（日本社会党機関誌局、1969 年）、68 頁。

[51] 新川、前掲書（2000 年）、125 頁。なお、新川は自らを「こうみえても自分ではアナーキストだと思っているから（笑）」とインタビューに答えている。新川、前掲（2006 年）、56 頁。

[52] ベネディクト・アンダーソンによれば、ナショナリズムが最も結合度が高く、異なる時、異なる方法でロマン主義、民主主義、理想主義、マルクス主義、アナキズム、ファシズムとでさえ結合するという。その意味でナショナリズムとアナキズムは決して相反するものではない。Anderson, Benedict. *Under three flags: Anarchism and Anti-colonial Imagination. New York and London: Verso books. 2006.* p.1.

[53] 森本眞一郎「島尾敏雄の帝国と周辺―ヤポネシアの琉球弧から―」『社会文学』第 21 号（日本社会文学会、2005 年）、54-74 頁。

[54] 島尾敏雄「南西の列島の事など」『島尾敏雄全集　第 16 巻』（晶文社　1982 年）、203 頁。初出は『朝日新聞』（1956 年 1 月 6 日）。

[55] 花田俊典「ヤポネシアのはじまり―島尾敏雄の日本地図」『日本文学』第 26 巻第 11 号（日本文学協会、1997 年）、34-42 頁。

[56] 仲里功「アジアという目線」読売新聞西部本社文化部編『対論「沖縄」問題とはなにか』（弦書房、2007 年）、116-118 頁。

[57] 川満信一「琉球共和社会憲法 C 私（試）案」『新沖縄文学』第 48 号（沖縄タイムス社、1981 年）、164-172 頁。

[58] なお、その思想的意義を積極的に評価しようとしたものとしては下記を参照。上野千鶴子『生き延びるための思想』（岩波書店、2006 年）、36-37 頁、西川長夫『＜新＞植民地主義論』（平凡社、2006 年）、136-140 頁。